

むかしむかし 昔々の そお市

郷土を知る

社会教育課 文化財係 ☎ 099-482-5958

第27回



鳴神遺跡の埋納石斧

鳴

神遺跡は大隅町八合原台地の北端にあり、縄文時代早期から近世にかけての大規模な集落遺跡です。平成5年から4年半にわたり、区画整備事業と旭ヶ丘公営住宅立替工事にともない約7万5千平方メートルが発掘調査されました。

それぞれの時代の成果では、縄文時代晩期の終末期から弥生時代に入る頃の遺物が大量に出土し、時代の変遷がうかがえます。古代から中世にかけては、規則的な敷石の道路状遺構を中心に、建造物にもなう柱穴群が大量に検出しています。

八合原台地は、現在ニュータウンとして民家や商業施設が建ち並んでおり、大昔から生活に都合の良い土地であったと考えられます。

また鳴神遺跡からは、やや変わった遺構も検出しています。縄文時代晩期の夜白式土器と共伴して、22本の石斧がまとまって埋められた状態で出土しました。出土した石斧の内訳は、磨製石斧13点・打製石斧9点で、使用痕の無い新品、長期の使用により刃部が磨滅または欠損したものの、丸ノミ状石斧と呼ばれる刃部がアーチ状のものと同様で、全て市指

定文化財となっています。

このように当時の人々が複数の遺物を意図的に埋めた遺構は、埋納集積、デポ (depot・仏語) と呼ばれています。埋納の理由は諸説あり、完成した製品や材料などを将来使用するためのストック、移動生活で運びきれないものを埋めて保存したものの、祭祀などが考えられます。

日本では後期旧石器時代から石槍・石斧の埋納例が見られ、弥生時代では銅鐸・武器型祭器の埋納例が多く、中世では経典や経筒といった仏教思想に基づく埋納、銭貨を壺や箱に納めた埋納が見られ、近世以降にも若干埋納例があります。また離島地域では、交易品の貝殻を埋納している例があります。

鳴神遺跡の埋納石斧は使用が可能なものが多いので、将来使用するために埋納され、そのまま忘れ去られてしまったものかもしれません。



【展示 曾於市埋蔵文化財センター】
曾於市大隅町月野1946番地1



石斧の検出状況